

JOMF 派遣医師便り (2012. 07)

◆シンガポール◆

H5N1 鳥インフルエンザの症例から考える

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

H5N1 鳥インフルエンザに罹患した 8 歳の女の子がシンガポールを訪問していたことがわかりました。(7 月 6 日、シンガポール保健省発表)。この少女は 6 月 18 日発熱で発症しています。翌日、母親と数人の親戚とともにシンガポールに来て、国内のホテルに 6 月 19 日から 24 日まで滞在しました。高熱のため、6 月 22 日にシンガポール国内の一般医のクリニックを訪れています。咽頭炎の診断で治療を受けました。24 日に帰国後も咳と体調不良が続き、食欲が低下し、嘔吐があり、家族が地元の病院へ連れて行きましたが、病状は悪化し、集中治療室での治療も施されましたが 7 月 3 日に死亡しました。検査により H5N1 鳥インフルエンザ A に感染していたことが判明しました。

H5N1 鳥インフルエンザは 2003 年から世界各国で散発的な発生が続いています。これまでのインドネシアでの感染者は 190 名(2012 年 7 名) で内 158 名(同 7 名)が死亡しています。全世界での累計感染者は 607 名(2012 年 29 名)、内 358 名(同 18 名)が死亡となっています。ただ、現時点では、まだ、効率的なヒトヒト感染をしているという状態ではないのがとりあえずの安心材料です。また、シンガポール国内での発生はありません。

シンガポール保健省はインドネシア政府および世界保健機構と密接に連絡を取り合っています。インドネシア保健省によれば、この患者さんはシンガポールに来る数日前に家禽との接触があったとのこと。父親に連れられて生きた鶏を市場に買いに行き、鶏をと殺す場所にいたとのことでした。インドネシア保健省はこの市場等で接触者検診を行っていますが、今のところ、他に発症者は見つかっていません。

シンガポール保健省は国内の全ての病院施設に警戒を呼びかけると同時に、この患者さんのシンガポールでの接触歴を調べています。この患者さんの母親、および接触のあった当地の親類、治療にあたった医師も発症していません。

シンガポールでは南半球の冬に当たる 6-7 月は毎年インフルエンザが流行します。当院にもこの時期、インフルエンザの患者さんが毎日のように訪れています。念のため当院では渡航歴、鳥との接触歴を問診表に書いていただいています。

シンガポールの日系でない一般医のクリニックでは通常はインフルエンザの簡易キットが置いてないため、はっきりとインフルエンザとは決めがたいということがあります。また、日系クリニックにはキットはありますが、検査のタイミングや検査の感度、特異度など、検査に限界があること、さらにキットでA型インフルエンザであることがわかって（H5N1 鳥インフルエンザはA型インフルエンザのひとつです）それがH5N1 鳥インフルエンザであることまではわからないことなど診断上、難しい点があります。

今回のような例を経験しますと、シンガポールへ患者さんが入ってくることは不可避であり、初見で鳥インフルエンザとはまず、診断できないことから、容易に流行が広まっていくことが懸念されます。

通常のインフルエンザが流行るこの時期、遺伝子再構成によりヒトからヒトへ容易に移る型に変化していくことが懸念されます。

私たちが出来ることは、まずは、通常の季節性インフルエンザを広めないような努力をすることかと思えます。シンガポール保健省が出しているように、常日頃から体力を保持し、うがい、手洗いの習慣、咳エチケットを守るといった地道な行動が大切です。

鳥との接触がなく、通常のインフルエンザにかかったと考えられる時には、マスクをして速やかに医療施設で診察を受けましょう。もし、鳥との接触があったと考えられるのであれば、感染拡大を防止する観点から、まずは医療機関に電話連絡しましょう。そこでどうしたらよいか相談してください。

以下はシンガポール保健省が出している鳥インフルエンザの発生がある国に行く時の注意です。これは発生が確認されていない国でも常日頃から気をつけておくべきことと思えます。

- # 生きている家禽、鳥との接触を避けること。特に小児は気をつける。
- # 十分に調理されていない鶏肉（卵を含む）を含んだ料理、生の鶏肉の料理を食べたり、扱ったりすることを避ける。
- # 商業的に鳥を販売している施設の裏庭や、市場の裏などには行かない。
- # 人ごみを避けること、通気性をよくしておくこと。
- # 生きている鳥を扱った後は、石鹸と水で徹底的に手を洗うこと。くしゃみ、痰などで汚染された手も同様
- # 常に衛生を心がけること。